

安間 総介 YASUMA, Sosuke

61 年自然科学科卒 (5 期)

昨年末にお亡くなりになった永野元彦君から ICU-DAY への推挙を受けた時の戸惑いと違和感は受賞が決まった今でも残っています。何故なら、僕の ICU 生活は何から何まで不本意なものと思い込んでいたからです。“How to speak”はさておいて1年生の英語の授業、特に手鏡で自分の悪面を見ながらの発音の授業は大嫌いでした。それがあって社会科学(歴史)から英語が少ない自然科学(物理)に変更したら、なんと担任がワース教授で物理も数学も英語の授業。そこで Friends の Work Camp,今で言うボランティアとその活動費を得るためのアルバイトに熱中し、ICU のイベントにも不参加が多く、試験の前夜に永野君の下宿でノートを見せてもらって、やっと留年をま逃れる始末。物理のグループ 6 人のうち僕だけが就職だったのも引け目を感じたようです。そんなですから、当時 ICU の重要な理念とされたリベラルアーツの意味など真剣に考えたことも無かったのです。

そんな僕が“5 期生の中で何故、初めて受賞するようになったのか。”、“はたして自分にその資格があるのか。”年末から年初にかけて考えざるを得ませんでした。同窓会事務局の文書に、僕の受賞理由として“「NHK の賞男」と呼ばれるほど世界の映像賞を数々受賞した。”とあります。ほとんどが有名校出身者の NHK 同輩ディレクターの中で、何故僕がそれほどの成果を挙げることが出来、それが ICU で得たものとどういふ関連があるかを考えてみました。

最初に得た国際賞は'74 年「空白の 110 秒」と題した 30 分の小品で、インドで墜落した JAL 機の事故原因にせまるドキュメンタリーでした。僕が入手したのはインドの事故裁判所で公開されたボイスレコーダーの音声テープでした。当時はテレビドキュメンタリーという言葉さえない時代で、先輩たちは当然のことながら“映像がなければテレビ番組はできない”と考えていました。しかし僕はこの一本の音声テープを科学的に分析することで 30 分のテレビ番組を作り上げました。この点が評価され、テレビで最も権威のあったイタリア賞のグランプリをいただきました。それがきっかけで僕は先輩たちとは逆に“真実に基づいた話さえ入手できれば映像は後からついてくる”という信念を持つようになりました。そして次に、アメリカでは無名のレオ・シラードという科学者が亡くなる直前に病院で録音した数十本の音声テープから'78 年「マンハッタン秘密計画」と題した 80 分の番組を制作し NHK 特集で放送しました。シラードは原爆の日本への投下に反対したために公的な歴史から消え、この番組は当のアメリカでもスクープ扱いになり、全国放送されました。そして世界中で放送されたのが'84 年「核戦争後の地球」で、全面核戦争が起きたら地球と人類はどうなるかを描いた 110 分の長編ドキュメンタリーです。欧米、日本、ソ連の科学者から集めた約 100 の科学論文を基にストーリーをつくりました。僕が生み出した“映像なしでテレビドキュメンタリーを制作する”信念を具現化するには映像文法の上での新し

いストーリーテリング手法が必要でした。従来のドキュメンタリーのように映像そのものが作り出すストーリーは期待できないのですから、それに変わる手法が不可欠です。それが論理的なストーリー展開です。作り物の映像で、説得力があり、かつ世界中の人が理解しやすい作品にするには理論的なお話の展開が最も効果的です。

“映像がなくてもテレビ番組はできる。”という信念に加えて“英語で書いた科学論文を斜め読みで大意が分かる”、“英語（ジャパニズイングリッシュ）で言いたいことが言える”能力も大きな力になりました。僕は寮でアメリカ、香港の先輩学生と同室でしたが、黙っていると寮の便所の掃除が一回増える事態を経験したことで、この能力に磨きをかけました。テレビジャーナリストにとって、英語より大切なことは物事を複眼で見る能力です。それには広い分野の知識が必要です。上述した 3 つの作品の場合、科学・技術に加えて近代史、国際政治の視点からの考察が不可欠でした。

こう考えてくると NHK 時代の成果に必要な能力の大半は ICU で得たことに気がつき愕然としました。もしかしたら、僕は気がつかないままにリベラルアーツの力を実証していたのかも知れませんね？

しかし、こうした能力は“真実を追究する”という目的を実現する道具にすぎないために気がつかなかったのかも知れません。

こんな思いで、戸惑いと違和感が半減し、授賞式に向かいます。推薦書を書いてくださった故永野元彦君と推薦者のご一同様、推挙を受け入れてくださった審査委員会と同期の皆さん、そして NHK 時代を支えてくれ、この 3 月に金婚式を迎えた妻、優子に感謝、感謝です。

袖井 孝子 Sodei, Takako

61年社会科学科卒（5期）

私にとって、ICUの1年目は本当にミゼラブルでした。一番の原因は英語力の不足。読み書きはできましたが、ヒアリングとスピーキングはまったく駄目。授業にでるのが苦痛で、寮に暮らしているにもかかわらず、しょっちゅう遅刻をして、とうとう太田先生のプロナンを落としてしまう始末でした。

生き返ったのは、専門教育が始まって、それまで見たことも聞いたこともなかった社会学という学問を知ったことです。当時、東京教育大学の助教授だった森岡清美先生と安田三郎先生に出会ったことが、私が社会学研究者の道を歩む契機になりました。ICUの付属研究所で資料整理のアルバイトをさせていただいたり、社会調査のお手伝いをしながら、社会学というきわめて人間臭い学問にだんだん深入りするようになりました。その後、東京都立大大学院やUCLAの大学院で社会学を学びました。

私にとって大きな転機になったのは、1972年に東京都老人総合研究所に職を得たことです。よく先見の明があったと褒められますが、当時は女性が大学にポストを得ることは至難の業でしたから、どんなところでもいいから就職したいというのが本音でした。すでに日本は高齢化社会入りしていましたが、高齢者問題に対する人々の関心は大変に低く、ある大学教授から「うら若い女性が老人問題をするなんて可哀想に」と同情されたものです。

その後、周知のように日本の高齢化はどんどん進みました。高齢者問題の専門家が少ないのに、女性研究者が珍しい時代だったおかげで、次々に仕事が舞い込み、国や東京都の審議会や委員会に参加する機会が増えました。厚生省、労働省、経済企画庁などでは、ICU出身の女性管理職が活躍しており、とても頼もしく思いました。

いくつかの審議会や委員会のうち、もっとも忘れがたいのは厚生省で「女性と年金検討会」の座長を務めたことです。これは女性の年金について初めて真っ向からとりあげた会議で、その成果は2004年の年金改正に反映され、離婚時の年金分割や遺族年金の見直しにつながりました。しかし、専業主婦が保険料を支払うことなしに老後、老齢基礎年金が受給できる第三号被保険者制度の廃止ないし縮減については、かなり時間をかけて議論したにもかかわらず、未だに実現していないのは大変に残念です。

高齢者問題を研究していたおかげで、1983年には高齢化社会をよくする女性の会（代表樋口恵子）の創設にかかわることになりました。以後、社会活動の機会が増え、現在では女性の副理事長に加え、一般社団法人シニア社会学会や一般社団法人コミュニティネットワーク協会の会長を務め、よりよい高齢社会の実現を目指す活動を続けております。

ICUで学んで一番良かったのは、既存の制度や慣習にとらわれない思考を身に付けられたことです。「ICU出の女は生意気だ」と陰口をきかれたこともありましたが、気にすることなくわが道を進んだおかげで道が開けました。後輩たちには、伝統や慣習の壁にぶつかっても、めげることなく進んでほしいと願っております。

大塚 信一 OOTSUKA, Nobukazu

63 年社会科学科卒（6 期）

私は ICU を卒業して、すぐ出版社に入りました。編集一筋の生活を 30 年送り、残りの 10 年間は経営に専心しました。ICU の幅広い教育は出版人とりわけ編集者にとってとても有用でした。自然科学・社会科学・人文科学・芸術とどんなテーマにも、まがりなりにも対応できたのは、本当に幸いなことと言わねばなりません。

私が具体的にどんな本や雑誌をつくってきたかは、拙著『理想の出版を求めて』（トランスビュー、2006 年）に詳しく書きました。幸いに同書は韓国・台湾・中国で翻訳出版されましたので、東アジアの出版人の多くが読んでくれました。とくに若い世代の編集者によく読まれているのは、何よりも嬉しいことです。

同書の柱の一つは、文化の総合雑誌『季刊へるめす』の創刊（1984 年、のちに隔月刊）です。編集同人（磯崎新、大江健三郎、大岡信、武満徹、中村雄二郎、山口昌男の各氏）とともに、私は編集者として学問と芸術に架橋するという意気込みで、諸外国の最先端のアーティストや学者にも多数参加してもらい、多彩な誌面を構成しました。こうした活動も、今から思えば、ICU の教育を受けたから可能になったのだと思います。

退職後は、友人たちとともに「東アジア出版人会議」をつくりました。中国・韓国・台湾・香港の代表的な出版人たちと年に 2 回、各地で国際会議を開いてきました。今年は 10 年目にあたります。その間、日-中、日-韓の政府レベルでのはりつめた緊張関係にもかかわらず、私たちは和気あいあいの議論と交流を続けてきました。

また一触即発の政治的危機のなかで、中国や韓国の友人たちは拙著（前掲書の他に『火の神話』〔平凡社、2011 年〕の韓国語訳があります）の翻訳出版のために必死に尽力してくれました。彼らは出版という草の根の文化交流がこそが、真に友好的な国家間の関係を築くと信じているからに他なりません。事実、直近の最悪な日-韓関係のなかで、最近の拙著（『松下圭一 日本を変える——市民自治と分権の思想』トランスビュー、2014 年）の韓国語版出版が進行しています。

私は ICU の I とはこのような具体的交流の実践だと思い、後期高齢者になった今も、隣国の出版人や若者たちと酒をくみかわし、議論を続けているのです。

安江 明夫 YASUE, Akio

69年社会科学科卒（13期）

私は長く図書館に勤めましたが、ICU卒業生には、私の同業者一即ち、司書など図書館関係者一が多くおられます。「図書館は大学の心臓」「公共図書館は民主主義の砦」と言われますように、図書館は大変、重要な役割を担っている機関です。ただそこでの仕事は、多方は地味で地道。今回、私は栄えあるDAY受賞者に選ばれましたが、賞は私にと言うよりICU出身の司書達全員に対してで、「司書」の社会的・学術的・文化的役割をICU同窓会がお認めいただいた賜物と理解しています。そのことにまず深謝申し上げます。

私は1969年3月にICUを卒業し、国立国会図書館に入館（就職）しました。入館後に私を支えてくれたのはICU図書館の利用体験で、国会図書館では直ぐに「安江は文句言い」の悪評（？）が立ちました。ICU図書館と比較しながら、国会図書館のサービスや運営について、「何でそうなの？」「この点は変えなくては」などと言いつけたからです。

とは言え、私は司書になるために国会図書館に入館したのではなかった。そんな私は、大図書館で機械の小さな歯車のような仕事に従事し、「これが自分の本当にやりたいことなのか」と思い悩みもしました。

仕事上の転機は、入館6年後、国会図書館から、新設のモントリオール大学（カナダ）東アジア研究所に派遣された時です。部屋と机・椅子しかなく1冊の本もない大学の研究所で、ライブラリーの創設を託されました。しかも言語は慣れないフランス語。そこで目いっぱい仕事をし、初めて「司書の仕事は素晴らしい！」「司書は私の天職」と感得しました。

モントリオール大学赴任の遠因もICUにあります。1966年秋、私が大学2年の時、森有正さん（フランス哲学者）がICUのコンボケーションで講演されました。渡仏された氏が17年ぶりにパリから日本に戻られた時です。氏の講演は「経験」「言葉」を巡ってだったと記憶していますが、とても感銘深いものでした。直ぐに私は仏語習得に乗り出しましたが、それは不首尾に終わり、結局、フランスとの縁はなし。けれども幾らかの仏語の素養により、仏語系モントリオール大学で仕事をするようになったのです。そこでの3年間の務めが以後の司書としての私を支えてくれました。

自分の仕事人生を振り返るとICU時代が如何に貴重であったかを改めて思い知らされます。例えば、私は現在、アジア諸国の図書館・アーカイブズの資料保存支援ボランティア活動（アドバイス、職員研修、調査など）を行っています。現地では司書・アーキビストあるいは教育者、政府関係者たちと英語でコミュニケーションしますが、「何が違うか」「どこが違うか」ではなく「何を一緒に目指すか」を基本に各地の人達と共に考え、取り組んでいます。こうした国際活動の動機付けも、スピリットも、糧も、私の場合はICU時代が源です。私がICUで学生生活を送った1965年~69年は、大学にとっては厳しい、困難な時代でした。授業数は限られ、人間関係的にも辛いことが多かった。そうではありましたが、にもかかわらず、ICUでの4年の間に学び、交わり、啓発されたことがその後の私の土台です。DAY受賞の機会がそのことを強く思い起こしてくれました。様々な想いを巡らしつつ、幾層にも重なるお礼を申し上げます。

安井 清子 YASUI, Kiyoko

84年教育学科卒

ICUでは、ワンダーフォーゲル部に所属していました。学問ではなく、部活の思い出ばかりで、情けないですが、とても楽しく充実した大学生活でした。そこで得た経験、体力、そして何よりもOB、先輩、後輩と世代を超えた大切な友人たちは、今も私の一生の宝物です。

卒業後2年目のことですが、タイのラオス国境にあった難民キャンプで、ラオスから逃れてきた山岳民族、モン族の子どもたちのための図書館作りを一人で任されました。モン族は、本がないどころか、元々文字を持たない民族。そこでどうやって図書館を作るのだろうか？と何もわからないまま、昼は難民キャンプで、絵本の絵を指しては、子どもたちからモン語を教わり、夜は、宿舎で絵本とにらめっこして、「いかに少ない言葉で、子どもたちにお話を伝えることができるか？」を考えました。絵から読み取れる情報の上に、どんな言葉を補えば、お話が伝わるか？を考え、そのモン語を覚えては、次の日、子どもたちの前で絵本を語ってみる。そして、子どもたちの反応を見てはまた、必要なモン語を加える……などの試行錯誤を繰り返し、少しずつモン語で絵本のお話を伝えることができるようになりました。子どもたちは絵本が大好きになり、夢中で絵本に見入るモン族の子どもたちを見て、子どもの心が必要とする世界には国境がないのだ……と知りました。

大学での授業からは、まるっきり関係のない世界に飛び込んだと思っていましたが、今、考えると、視聴覚教育やコミュニケーション……結局は概論を学んだだけで終わってしまいましたが、専攻した教育工学で学んだことと、おおいに繋がっていたようです。

モンに語り継がれているダネンという民話をはじめて聞いた時、語りだされる言葉が織りなす口承文学の世界に圧倒される思いがしました。文字がないからお話なんてないのだろう……と軽く考えていた自分が恥ずかしくなり、それ以降、録音して記録することを始めました。その後、ラオス国内でも、山の村に長老を訪ねあるき、民話を録音していますが、やはり時代の流れに押され、少数民族の民話などは忘れ去られ消えつつある状況の速度は増しています。なんとか、これまでに録音記録したものを、モンの人たちの手の元に残したい。次世代につなげるためには、魅力ある媒体として残していきたいというのが、これからの課題となっています。

今は、ラオスに住んでいます。モン族の村に2カ所、ヴィエンチャンの自宅横にも、近所の子どものために遊びに来られる小さな図書館を作っています。どんな状況に生まれる子どもたちにも、夢を持って生きて欲しい。そのために自分ができることは、図書館活動を通して、子どもたちに広い新しい世界への扉を開くことだと思っているからです。

この度、DAY賞をいただけることになり、大変、光栄であります。今現在、関わっている活動がまだまだ発展途上にある状況の私にとっては、「まだまだ！頑張りなさい」ということなのだ、と身を引き締める思いです。でも何よりも嬉しいのは、ICUの方々が見て下さっていたのだ、ということ。フリーランスで、「自分ができることをやる」という範囲内で、ちょっとはずれた道を歩いてきた私にとっては、本当に驚きであり、喜びです。今後も、受賞させていただいたことに恥じぬよう、努力していこうと、心に誓っています。

近著：「ラオス 山の村に図書館ができた」(福音館書店)

「ラオスの山からやってきた モンの民話」(ディンディガルベル)